

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 宇田川洋

周知のように、北海道・樺太・千島列島にはアイヌと呼ばれる人たちが居住した。このアイヌについては主に民族学や言語学からの研究が行なわれてきたが、その民族や文化としての成立の起源を求めるとなると、彼ら自身が文字記録を持たなかったために、考古学の対象である物質資料にたよらざるをえない。しかしアイヌがアイヌ文化と呼びうる文化を持つようになったのは、さかのぼっても内地の中世のことであったので、従来の考古学の常識的な考えかたからするとあまりに新しい時代にすぎ、1960年代まで積極的な研究はおこなわれてこなかった。この未開拓の分野に全面的にとりくみ、アイヌ考古学の基本的骨組をつくりあげたのが、当該論文『アイヌ考古学・序論』である。

この論文において筆者はアイヌに関して考えうるほとんどあらゆる物質資料を順にとりあげる。それは住居・炉・土鍋・鉄鍋・軽石製火皿・煙管・矢尻・狩猟用具・仕掛け弓をはじめとする畏類・さまざまな木製品・弦楽器・狩猟動物の遺存体・動物意匠製品、送り場遺跡、・砦であるチャシ・集落・墓地におよぶが、その一つ一つにおいて、氏は資料を悉皆的に集成、分類し、その変化の過程を解明し、生活の中での位置付け、社会的意味、精神的な面での考察に及ぶ。

扱った資料の中心は当然出土遺物であるが、比較研究の対象は民具資料全般におよび、その性格究明のため、和人による文献記録を隅々まで渉猟し、伝説までが重要な情報源として網羅的にとりあげられる。その比較の対象は本来のアイヌの居住地を大きく超える極北地域、東北ロシアにおよび、そこにおいても物質資料、歴史記録、伝説が精力的に追究される。同時にまた津軽の豪族安東氏や十三湊の動向に対しても丁寧な目配りが示される。

各章の中でももっとも労作といえるのはチャシの研究である。これまでに知られるすべてのチャシをリストアップし、川すじごとにその立地と形態を分類するだけでなく、各チャシにかかわる江戸時代の文献記録、伝説を細大漏らさず収録し、コタンや推定人口との関係が細かく考証され、その変遷過程が分析され、チャシの変化がアイヌ内の争乱、和人との対立の激化に関係することが

示される。

アイヌ文化は本来民族学的な概念であるが、考古学的な面からその成立を求める筆者は、先行するオホーツク文化や擦文文化の中に形成されてくるさまざまな物質文化諸要素とのつながり、祭祀などの精神的要素のつながりを指摘する。そしてアイヌ文化の成立については、土器と竪穴住居の消滅を重視するが、その背景に、和人による、毛皮などの北方資源を求める交易活動の活発化が、鉄鍋など和の産物を大量にもたらし、それが従来の自給自足的な生活形態を変化させ、土器やかまどをとともなう竪穴住居の廃絶をもたらしただけでなく、やがては、アイヌの存在を自己の利益のために利用しようとする和人との対立が、自己をアイヌとして他者から区別する民族意識の形成に大きく影響したことが考察される。

ただしこのような理解は各章に分散して記述され、まとまった記述はなされていない。それどころか、この論文は個々の遺物の丁寧すぎるほどの記述と分析が延々と続いたあと、全体としてのまとめがないままに突然に終るのである。本論文にアイヌ文化の成立と変質の過程を安直に学ぼうと期待する読者は失望するに違いない。しかしここに筆者が本論文を「序論」と銘うった意味が浮かび上がる。氏が牽引車として開拓してきたこの分野、可能な限りの手段をつくして展開してきたこの新しい分野であるからこそ、宇田川氏はこの分野の研究がまだ「序論」の段階にすぎないとみなし、安易なまとめを避けたのであろう。それでも今回、基本資料の悉皆的吟味の終了をもって研究の第1段階の完了を宣言したのである。未完成であること、まとめがないことは、氏がなしとげたものの大きさを考えるなら、けっして学問として価値の低さを意味しない。

ここに一つの新しい学問分野の全容が開示され、その骨組が示された。この分野で今後続くすべての研究者は、好むと好まざるとにかかわらずこの宇田川氏が築いた確固とした土台によって研究を進めることになる。もちろん宇田川氏自身が続く研究の展開について何を構想されているか、ヒントは各章に散りばめられているのである。

以上、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位の授与に価することを全員一致で認定した。